

第51回 アフリカ・東南アジアのイスラーム化

1 アフリカのイスラーム化

- ・北アフリカ以外のアフリカでは、ナイル川をさかのぼった上流域のエチオピア・西アフリカ・アフリカ東岸などで、黒人の王国が栄えた。

<エチオピア>

- ☆ () (前920年ころ～後350年ころ)
- ・ナイル川上流の国で、エジプトを除けばアフリカ最古の黒人王国。
→アッシリアの侵入後、中流域の () に南下した。
※これ以後のクシュ王国をメロエ王国とも呼ぶ。
- ・メロエ文字を利用したが未解読。



メロエのピラミッド
古代エジプトとの関係が深い。
製鉄技術にすぐれていた。

- ☆ () (エチオピア王国) (紀元前後～12世紀)
- ・4世紀に、クシュ王国を滅ぼしてエチオピアを支配した。
- ・紅海方面に進出し、金・奴隷・象牙の交易で栄えた。
- ・キリスト教のコプト派 (コプト教) を信仰していた。



阿克苏ムの石柱

この石柱は王の墓に建てられており、墓標だったと考えられている。王国の滅亡年には諸説ある。

<西アフリカ>

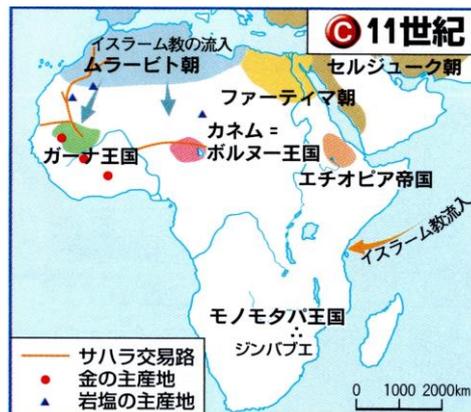
- ☆ () (7世紀ころ～13世紀半ばころ)
- ・西アフリカの () ・セネガル川の上流域に建国された黒人王国。
→サハラ北部の () と、西アフリカ (ギニア) の () ・象牙を交換するサハラ交易 (塩金交易) で栄えた。
- ・1150年、 () に攻撃され衰退していった。



マンサ＝ムーサ
大量の金をばらまいたため、カイロの金相場は暴落した。

- ☆ () (1240～1473年)
- ・ニジェール川上流域に建国された黒人王国。
- ・ () を受け入れて、交易の中心地として繁栄した。
- ・14世紀には、モロッコの大旅行家 () も訪れた。

- ◆ () (在位1312～1337年)
- ・マリ王国の最盛期をもたらし、メッカ巡礼の際には金を湯水のように使った。



☆ () (1464~1591年)

- ・ニジェール川流域に建国された黒人王国で、マリ王国を滅ぼした。
- ・ニジェール川中流の都市 () が交易で栄え、16世紀には黒人による最初の大学も創設された。



ニジェール川
西アフリカを流れ、ギニア湾に注いでいる。アフリカでは3番目に長い川である。

☆カネム=ボルヌー王国 (8世紀ころ~1846年)

- ・現在のチャドに建国された黒人王国。

<アフリカ東岸>

- ・インドやイスラーム世界との交易が盛んに行われ、モガディシュ・()・()・()の海港都市が拠点として発展した。
→ムスリム商人が多く訪れたため、現地のバントゥー諸語とアラビア語が混じり合った () など、独自のスワヒリ文化が誕生した。

- ・アフリカ南部の () 流域には、() と呼ばれる巨大な石造遺跡が作られた。
- ・ジンバブエを受け継いだ () は、金の交易で栄えた。



ジェンネの大モスク

現在のマリにあるジェンネはトンブクトウの近郊にある都市で、「双子の姉妹」と称されていた。泥で作られているため、「泥のモスク」とも呼ばれる。



グレート=ジンバブエ(大ジンバブエ遺跡)

現在のジンバブエにのこる巨大な石造遺跡。そもそもジンバブエとは「石の家」という意味である。モノモタパ王国の遺跡という説には、異論もある。

2 東南アジアのイスラーム化

- ・イスラーム世界が拡大していくと、ムスリム商人の活動も活発になっていった。
→ムスリム商人は、() という三角帆の船を用いて、中国・インド・東南アジアの物産を「海の道」を通じてエジプトなどに運んだ。
→そのなかで、イスラーム教を受け入れる東南アジアの国が登場した。

☆ () (14世紀~1511年)

- ・マレー半島とスマトラ島に挟まれたマラッカ海峡を支配し、アユタヤ朝への対抗から () へ改宗した。
→15世紀には、明の () が南海大遠征の途中に立ち寄っている。



ダウ船

三角帆で、竜骨がなく釘を使わずに組み立てられている。21世紀の現在でも幅広く使用されている。

<インドネシアのイスラーム国家>

- ・スマトラ島北端の ()、ジャワ島西部のバンテン王国、ジャワ島東部のマタラム王国などのイスラーム教国が、15~16世紀に建国された。